

【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

近世唐音における声調の扱い

東京大学大学院博士課程学生・日本学術振興会特別研究員 王 竣磊

1 はじめに

近世唐音とは、禅僧隱元隆琦（1592-1673）・東皐心越（1639-1695）の来日や、長崎で行われた唐船貿易などによって、日本に移植された漢字音体系のことを指し、日本漢字音の中では最も新しい層だとされている。有坂（1938）は、伝来の過程を重視し、近世唐音をさらに黄檗系・心越系・訳官系の3つに分けているが、いずれも当時の中国語音に接してできたものだと考えられる。「花フアー」「在ヅアイ」「教キヤ〇ウ」「魚イユイ」などの音注形からわかるように、近世唐音には、仮名表記を駆使して中国語音をできるだけ忠実に書き表そうとする姿勢が看取される。

一方、中国語において欠かせない声調については、表記手段に限界があったためか、あるいは表記すること自体が必要でなかったためか、文献上、現れないことが多い。例えば黄檗系の『禅林課誦』（1662）、心越系の『寿昌清規』（1727）、訳官系の『唐音和解』（1716）など、いずれの系統にも、仮名音注を有していながら声調を全く表記しない文献の存在が指摘できる¹。これを受け、沼本（1992）は「声調の習得を放棄してしまったものではなからうか」（p.114）と述べ、さらに日本語の音節構造の推移と関連づけて論じている。

しかし、近世唐音には、実は声点が施された文献も少なからず存在しており、そこから原音声調の実態や、日本における受容の過程、当時の日本人の韻律感覚を窺い知れるかもしれない。にもかかわらず、これらの文献における声点の性質や加點状況などの課題については、先行研究が非常に乏しく、ほぼ手つかずのままだと言わざるをえない。よって、本稿では、これら声点の加點された近世唐音資料を対象に、(1)加點の種類、(2)単調字の処理、(3)多調字の処理を順に考察し、近世唐音における声調の扱いを把握してみる。なお、本稿で扱う「単調字」とは、『広韻』によって規定された中古調類を1つしか有しない字のことを指し、本稿で扱う「多調字」とは、こうした中古調類を複数有する字のことを指す²。

2 声点が加點された文献

2-1 加點の種類

近世唐音に用いられた声点の様式は、点と圏の2種類に大別する。前者は、「○」「●」「ゝ」とあるように、文献によって形が異なるが、いずれも筆画と被らないように、字の外側に付されている。それに対し、後者は文献間に形の異同がみられず、「○」で筆画の一部を囲い込むように付されている。また、

¹ 『禅林課誦』は東京大学国語研究室蔵本（和本2011:1）を、『寿昌清規』は国立国会図書館蔵『東皐全集』別録所収本（249-2）を、『唐音和解』は関西大学総合図書館蔵本（長澤文庫L23**800*6124-6125）をそれぞれ使用して確認した。

² ここでいう「単調字」「多調字」は一般的に言う「多音字」の概念と異なることに注意されたい。「多音字」であっても、例えば「朝」が知母（現代普通話 zhāo）と澄母（現代普通話 chāo）の読みを有するが、いずれも平声なので、本稿では「単調字」に分類されることになる。

近世唐音に採用された声点の体系は、「平上去入」の四声体系に統一しており、従来の日本漢字音にみられる六声体系や八声体系は確認されない。

声点が加点された文献は、とりわけ被注漢字の量（異なり字数）において異なりをみせ、管見に及んだ範囲内では、以下の4つの類型が挙げられる（図1も参照）³。

図1 各類型のイメージ

第Ⅰ類	第Ⅱ類	第Ⅱ類変種	第Ⅲ類	第Ⅳ類
●好 ●事 ○上 ●門	○滄 ○浪 ○之 ○氷	○草 木 ○黄 落	相 逢 ○此 地	無 量 無 辺

第Ⅰ類＝すべての字に点と圏で加点し、そのうち圏をもつばら破読に用いたもの。

『唐話纂要』の増補部にあたる巻六「和漢奇談」（1718）

『唐話使用』（1725）

『唐音雅俗語類』（1726）

『唐訳便覧』（1726）

『唐音学庸』（1727）

第Ⅱ類＝すべての字に圏のみで加点したもの。

『四書唐音弁』（1722）

明和九年版『東臯琴譜』（1772）

第Ⅱ類の変種＝入声字を除くすべての字に点のみで加点したもの。

天保十五年識語写本『明東臯禪師琴譜』（1844）

³ 『唐話纂要』『唐話使用』『唐音雅俗語類』『唐訳便覧』『慈悲水懺法』『遊焉社常談』は東京大学国語研究室蔵本（A2:0014:1~6、松村文庫 A2:0005:1~3、011A:16:1~2、011A:14:1~5、松村文庫 A6:0001、20B:60）を、『唐音学庸』・天保十五年識語写本『明東臯禪師琴譜』・文政十年版『琴譜』は関西大学総合図書館蔵本（長澤文庫 L23**A*6140~6141、泊園文庫 LH2*3.03**97、泊園文庫 LH2*3.03**98-1~3）を、『四書唐音弁』は京都大学附属図書館蔵本（1-66||191）を、明和九年版『東臯琴譜』はハーバード燕京図書館蔵本（TJ 6771 3343）を、『東臯琴譜』は東京都立図書館蔵寛政九年版本（特 3036）・同館蔵文久二年写本（特 3039）・国立国会図書館蔵江戸後期写本（832-197）を、『忠義水滸伝解』は東京大学東洋文化研究所倉石文庫蔵本（倉石:923:299）を、それぞれ使用して調査した。以下同様。

第Ⅲ類＝一部の字に圈のみで加点し、圈の位置がもっぱら上声と去声のもの。

『東臯琴譜』と題した文献群。例えば東京都立図書館蔵寛政九年版本（1797）、同館蔵文久二年写本（1862）、国立国会図書館蔵江戸後期写本が挙げられる。また、題名がやや異なるが、文政十年版『琴譜』（1827）もこの類に属する。

第Ⅳ類＝もっぱら破読に圈で加点したもの。

『慈悲水懺法』（1670）

『唐話纂要』の初刊部にあたる巻一～巻五（1716）

『忠義水滸伝解』（1757）

『遊焉社常談』（1770）

上述のほかにも、調査を進めば、さらに多くの声点加点文献が発見されると考えられるが、本稿ではひとまず上述の範囲で各類型の詳細を考察する。

2-1-1 第Ⅰ類

第Ⅰ類に属するものはいずれも岡島冠山（1674-1728）が編纂に携わったもので、点と圈を区別して加点するのが特徴的である。文体からすれば、『唐話纂要』『和漢奇談』が通俗小説の体裁を採っており、『唐話使用』が会話の教科書の性格を有しているように、総じて白話文のものが主流となる。その中で、『唐音学庸』は単に朱熹の『大学章句』『中庸章句』に訓点を付しただけのもので、当然ながら純粋な文語文に属する。同書の見返しには「論孟嗣出」と書かれており、あるいは岡島冠山は同じ形式で『唐音論孟』の出版も計画していたかもしれない。すなわち、岡島冠山による声点の加点は、白話文にとどまらず、文語文に対してもある程度行われたと推測される。また、第Ⅰ類の文献にはいずれも「有点四声」「每字点四声」との注記がみられ、声点の付点を明示している。これはほかの類型、たとえ岡島冠山自身による『唐話纂要』の初刊部でもみられず、第Ⅰ類ならではの特徴だと考えられる。

2-1-2 第Ⅱ類とその変種

第Ⅱ類に属するものは少なく、上に挙げた『四書唐音弁』と、明和九年版『東臯琴譜』・天保十五年識語写本『明東臯禅師琴譜』についてもそれぞれ第Ⅰ類と第Ⅲ類に関連していると考えられる。

『四書唐音弁』には岡島冠山の序と編纂者である朝岡春睡（生没年不詳）の自序がついており、朝岡春睡が岡島冠山に唐音を習ったと記されている。同書は題目の通り、「学庸論孟」の四書から字を抜き出し、画数によって配列し直すものである。字書の性格を有する点で近世唐音において特徴的であるが、第Ⅰ類に挙げた『唐音学庸』とはほぼ同じ時期に出版されたことから、やはり岡島冠山の文語文への唐音加点の延長線上にあると考えられる。しかし、圈のみ使用された点と、破読に特別な処理が施されていない点で岡島冠山のものと異なり、朝岡春睡の独自性が垣間見える。

一方、明和九年版『東臯琴譜』は次に述べる第Ⅲ類と同じく心越系に属しており、内容に関しても、収録の曲目・曲数に出入りがあるものの、大方一致していると認められる。次の第Ⅲ類では、基本的に一部の漢字にのみ声点を付するような形式を採っているが、例えば文久二年写本では「滄浪歌」と「漁樵問答」の2曲はすべての字に声点が付されている。明和九年版本は、第Ⅲ類に挙げた諸本より、成立が早いものとなるが、『東臯琴譜』の伝承において全文に声点を施すことも行われた可能性がある。しかし、同版本では、語句の区切りにあたり、句読点直前あるいは句末助辞直前の字の声点がほかよりも4

倍ほど大きいとみられる。このような処理は第Ⅲ類の諸本にみられない。音楽上の要請による処置かどうかは不明であるが、同版本はやはり第Ⅲ類のものとやや離れている。

全文への加点から入声字を除いたものは天保十五年識語写本『明東阜禅師琴譜』となる。入声字が閉鎖音韻尾を持ち、ほかの舒声字と音声実現が異なるためか、それとも入声字がもっぱら短い音注形を持ち、ほかの舒声字と比べて比較的容易に識別できるためかは判断しかねるが、結果的にすべての字に声調の情報が与えられることになり、第Ⅱ類の変種だと考えられる。しかし、ほかの第Ⅱ類のものと異なり、点の声点が使われた点で特徴的である。同類のものがほかにあるかどうか、また、ほかの琴譜にどう関わるのかについては今後のさらなる研究に俟ちたい。

2-1-3 第Ⅲ類

第Ⅲ類に属するものは、内容面からいえば、『東阜琴譜』の類のみであり、文体的にみれば、各時代の韻文を集め、琴の音楽に乗せたものとなる。ほぼ上声点と去声点しか付されていない点で特徴的であり、その加点の実態は3-2節で詳述する。また、同類型に属するものは概ね版本への書入れ（寛政九年版本の場合）か写本で、収録の曲目・曲数は諸本間で異なり、被注漢字の量も異なっている。例えば、寛政九年版本16曲の書入れは、98異なり字に加点しているが、文久二年写本33曲は、全文加点のものを除いても303異なり字に加点している。にもかかわらず、上声と去声を中心とする加点の姿勢は一貫しており、同じ源流まで遡れると考えられる。

2-1-4 第Ⅳ類

第Ⅳ類は、ほかの類型と比べると、被注漢字の量が最も少なく、加点は概ね字体の仮借か多調字かに限られている。文体からすれば、黄檗系の『慈悲水懺法』は、いわば仏教漢文ならではの言い回しがみられるものの、文語文の一種とみなして差し支えないであろう。それ以外はやはり通俗小説の注釈書か中国語会話の教科書で、白話文に分類できる。また、『游焉社常談』巻上には、圏のほか、小さい「○」の点も15箇所ほど使われており、「葱」「蒜」「芥」「莧」「枳」「棋」「梔」とあるように、植物名を構成する字が半数以上占めている。これは、単に同文献の編纂者である石川金谷（1737~1779）の個人的な関心を示しているだけかどうか、不明であるが、局所的かつ限定的に使用された点の声点は、ほかの第Ⅳ類の文献にはみられず、特徴的である。

2-1-5 書入れによる部分的な加点

以上の4類型は、いずれも文献全体の加点状況を意味するが、それとは別に、書入れによって文献の一部にのみ声点が付されたものもある。管見の限りでは、東京大学東洋文化研究所倉石文庫蔵『唐話纂要』巻一「太平」条（1オ4）から「讚嘆」条（3オ6）までの部分と、東京大学国語研究室松村文庫蔵『唐詩選唐音』（1777）五言絶句「主人不相識…」（1オ6）から「…春日路傍情」（4オ7）までの部分とが該当する。両者はいずれも朱筆による加点で、文献の冒頭の数丁分にしか加点されていないが、範囲内のほぼすべての字に加点している。声点の様式は第Ⅰ類に準じ、点と破読の圏との2種類が使われているが、『唐話纂要』書入れでは点も圏も漢字と重なるように付されており、『唐詩選唐音』書入れでは点も圏も漢字から離れている。また、『唐詩選唐音』の圏は「△」の形をしており、ほかの類例が見当たらない。このような声点の部分的な書入れは、あるいは第Ⅰ類の加点法を使用した唐話学習者の手によ

るものなのか、不明である。本稿では、このような書入れに対し、報告にとどまり、一つの類型としない。

2-2 もう一つの類型

以上、近世唐音における声点の加點類型を概観してきた。ここでは、唐音音注を有しないのに声点を有する文献として、遠山荷塘（1795～1831）『諺解校注古本西廂記』（江戸後期写）⁴を取り上げたい。同書は北曲の詞曲書として名高い『西廂記』を「諺解」すなわち訓点と注釈を加えたもので、本文とりわけ曲の部分には圈の声点がみられる。被注漢字は概ね破読にあたる字か入声字で、入声は周德清『中原音韻』（1324）に従って平上去声へ帰されている。この声点は遠山荷塘の手によるものではなく、底本である王驥徳『新校注古本西廂記』（万暦甲寅 1614 自序）⁵にみられる圈の声点をそのまま写したものと認められる。

樊（2017）は諺解本の成立過程を考察し、遠山荷塘が底本を凌蒙初本から上述の王驥徳本に変えたと論じている。さらに同論文は、その改変の理由について、遠山荷塘が長崎で唐話を身につけ、江戸で唐話による俗文学の会読や講義を行ったことがあること、そして凌蒙初本よりも音注が豊富な王驥徳本のほうが原文を唐話で読むのに適していることを述べている。これは、遠山荷塘が唐話で通俗小説『金瓶梅』を講読したことにも通じており（川島 2009）、妥当な結論だと考えられる。しかし、樊論文はもっぱら王驥徳本の音注について論じ、随所みられる声点の存在には全く触れていない。長崎で学習された唐話として、「南京口」「福州口」「漳（泉）州口」が挙げられるが、いずれも入声の有する体系であり、入声のない河朔地方の方言に基づく北曲を読むのに適さないと考えられる。すなわち、声点の存在とりわけ入声字の平上去声への加點も、声点のない凌蒙初本より王驥徳本のほうが選択された重要な理由となりうる。声点が講読において具体的にどのような役割を果たしていたか、そもそも王驥徳が声点を加點する目的は何なのか、さらなる調査と考察が必要であるが、本稿では可能性の提示にとどまる。

いずれにせよ、『諺解校注古本西廂記』にみられる声点は、中国人の加點が近世に俗文学の伝播とともに日本に流入した例と言えよう。

3 単調字の処理

3-1 第Ⅰ類

本稿では、第Ⅰ類の中で、『唐話纂要』巻六「和漢奇談」、『唐話使用』巻四～巻六前半「説話」、『唐音学庸』の3つを対象に、単調字の加點を中心に調査した。そのうち、『唐話纂要』「和漢奇談」は初刊部である巻一～巻五と同じ仮名音注の体系を有し、その原音音系が呉語文読層であると判断され、『唐話使用』「説話」と『唐音学庸』は王（2024）でいう「岡島冠山官音」の体系を有し、その原音音系が江淮官話共集片であると判断される。調査の結果、いずれの文献でも声点の加點例が約1000異なり字に及び、その声点は基本的に中古調類に符合しており、原音音系の違いを反映していないと確認された。そのうち、中古調類に一致しない加點例はいずれの文献でも見受けられるが、多くともわずか50異なり字程度にすぎない。本文末尾の〔附録A〕にその一覧を示す。

⁴ 古典研究会編（1977）所収影印を使用して調査した。

⁵ 国立公文書館内閣文庫蔵本（309-0099）を使用して調査した。以下同様。

3-1-1 中古調類通りの加點

このような整然とした対応関係からみれば、第Ⅰ類における加點は、原音の調値の種類を捉えたものではないことがわかる。これは、従来の日本漢字音における呉音声調と異なり、漢音声調の様相を彷彿させる。しかし、漢音声調では、南北朝時代まで、平声と入声にそれぞれ軽・重の区別が設けられた六声体系が中心的であり（佐々木 2009）、原音音系における陰陽調類の分裂に対応するものだと考えられる。全濁上声字についても、原音音系における去声化を反映するように、もっぱら去声と加點される文献が存在する（沼本 1973, 佐々木 2009）。それに対し、『唐話使用』『説話』と『唐音学庸』では、当時の江淮官話に陰陽の分裂と全濁上声字の去声化が十分想定できるにもかかわらず、中古調類通りに加點されており、現実を反映したものとするのが難しい。

一方、呉語について考えると、各調類が陰陽に分裂しているものの、声母における有声・無声の対立も保たれているため、『唐話纂要』『和漢奇談』において、声点と仮名音注の濁点の有無を併せてみれば、いわゆる「四声八調」の体系を導き出せなくもないが、これは極めて抽象的な方法であり、意図的にこのような音写法を採用するのがとても考えにくい。また、仮にこのような方法が実際に採用されたとしても、影母三等と以母の区別ができない点や、匣母が影母と同様にアヤワ行で表記されることがある点において、やはり無理がある。全濁上声については、例えば現代紹興のように、呉語では全く去声化しない方言も存在する。そのような方言を原音音系とすれば、去声化の影響を受けずに中古調類に近づくことができるが、仮名音注が共通語性の高い文読層に属することからすれば、やはり現代杭州や蘇州のように去声化している方言を想定すべきであろう。よって、『唐話纂要』『和漢奇談』の場合でも、声点を現実の反映とするのが難しい。

総じて、第Ⅰ類では、加點こそ字ごとに行われたものの、その声点はあくまでも知識レベルのものにすぎず、現実の音調を描写したものとは言いにくい。

3-1-2 中古調類に一致しない加點

〔附録A〕をさらに整理し、各中古調類の加點状況を統計すると、表1の通りである。表1における中古調類欄の「他」は多調字の場合を指し、ここでは単調字を中心に分析するため、参考までに付した。各文献欄の「他」は圏の声点を加點した場合と同じ字に2種類以上の声点を加點した場合（『唐音学庸』17「慥」のみ）を指す。

表1 第Ⅰ類における中古調類に一致しない加點

		『唐話纂要』『和漢奇談』					『唐話使用』『説話』					『唐音学庸』				
		平	上	去	他	延	平	上	去	他	延	平	上	去	他	延
中古調類	平	—	6	4	1	11	—	3	5		8	—	4	2		6
	上	3	—	16	1	20	5	—	13	2	20		—	12	2	14
	去	1	14	—		15	4	9	—		13	2	11	—	1	14
	他		6			6		7		2	9	1	2			3
	延	4	26	20	2	52	9	19	18	4	50	3	17	14	3	37

表1より、いずれの文献でも、中古上声字への去声加点および中古去声字への上声加点、すなわち上声と去声の混同が顕著であると看取される。多調字の場合では、ほとんど中古調類が平去のものに上声点が加点された例であり、個々の用例に即して元の調類を決める必要があるが、本来去声であるべきものに上声が加点された可能性が高い。圏の声点が付された「動」「善」「項」「道」についても、特定の用法による変調の可能性は否定できないものの、やはりすべて全濁上声字に去声が加点された例となる。

まず、中古上声字への去声加点についてみると、『唐話纂要』『和漢奇談』では非全濁9字（且野改彼始紀保審整）：全濁7字（厦待是似辨尽蕩）で、特に全濁声母字に偏っているわけではない。一方、『唐話使用』『説話』では非全濁3字（改毀頌）：全濁10字（禍部待怠罷倍罪件尽静）、『唐音学庸』では非全濁4字（博審頭頌）：全濁8字（緒待倍罪備辦辨非）とあるように、全濁声母字に偏っていると看取される。続いて中古去声字への上声加点についてみると、『唐話纂要』『和漢奇談』では非全濁8字（屢祭誨最置記鬪困）：全濁6字（歩預附住誓噬）、『唐音学庸』では非全濁5字（季畏枉暢讓）：全濁6字（喻誓第示佑僅）で、偏りがみられないが、『唐話使用』『説話』では非全濁7字（借這屢注懈替遜）：全濁2字（純旺）とあるように、非全濁声母字に偏っていると看取される。いずれの文献においても、こうした不一致の字数が少なく、上声と去声の混同の性質を判断するのに慎重を期さなければならないが、声母音類の清濁からでは統一的に説明することができないようにみえる。

また、従来の呉音・漢音においても「去声字の上声化」が指摘され、漢字声調が日本語の音韻変化に従って変化した現象として解されている（沼本1976、石山2011ほか）。しかし、近世唐音に関しては、3-1-1節ですでに確認したように、第I類の声点は原音音系の違いを超えた知識レベルのもので、特定の調値に結びついていないと考えられる。仮に個別的に原音の去声の調値を強く意識したとしても、中国語を学習した場で、直ちにそれを日本語の音韻に取り込み、変化させたとはいえにくい。また、本稿ではすべての用例を示したわけではないが、〔附録A〕に挙げた用例からでも確認できるように、上声点が加点された去声字は語頭にも語中にも現れ、語中の場合、前の字の声調が平上去入のいずれもありえて一定しない。すなわち、中古去声字への上声加点は特定の音環境のもとで発生したものではなく、単字レベルの現象だと考えられる。

以上、中古調類に一致しない加点例の中で、上声と去声の混同についてみてきた。上述したように、統一的な説明を与えるのは難しいが、本稿では、一つの解釈案として、原音音系が参照された可能性を提示したい。第I類の加点は基本的に中古調類に基づくことになるが、加点の過程において、調類を判断する手助けとして現実の音声もある程度参照されたであろう。

原音音系では、表2に示したように⁶、多くの方言で全濁上声字の去声化が発生していると確認される。また、建湖、江寧（南京）、蘇州、上海、嘉興とあるように、上声と去声の調値が近く、混同されやすい体系も存在する⁷。こうした原音音系の音声を参照して判断した結果、逆に混同してしまい、中古調類に一致しない加点が現れたのではないかと推測される。

⁶ 呉語の調値は趙（1928）の記述による。同記述では音符が使われているが、ここでは五度法に改めた。江淮官話の調値は呉（2007, 2020）の整理による。同整理は各地の地方志の記述に基づいている。

⁷ 現代上海方言の新派では、さらに陰上と陰去が1つに合流したと報告されている（許ほか編1988）。

表2 原音音系の代表的な方言（8地点）の調値

	呉語				江淮官話洪巢片			
	杭州	嘉興	上海	蘇州	鎮江	揚州	江寧(南京)	建湖
陰平	323	31	41	44	21	21	31	31
陽平	212	121	113＝陽去	114	35	34	24	213
陰上	51	全清313 次清 13	323	42	313	42	22	55
陽上	次濁:陰上 全濁:陽去	212	次濁文:陰上・陽去 次濁白:陽去 全濁:陽去	次濁文:陰上・陽去 次濁白:陽去 全濁:陽去	次濁:陰上 全濁:去	次濁:陰上 全濁:去	次濁:陰上 全濁:去	次濁:陰上 全濁:去
陰去	44	323	324	523	54	55	44	45
陽去	23	113	113＝陽平	442				
陰入	<u>55</u>	<u>44</u>	<u>55</u>	<u>44</u>	<u>44</u>	<u>44</u>	<u>55</u>	<u>55</u>
陽入	<u>12</u>	次濁・匣・陰入 以外212	<u>23</u>	<u>23</u>				

最後に、原音音系の調値が参照された可能性を示すものとして、『唐話纂要』「和漢奇談」01「阿」と『唐話使用』「説話」19「只」にみられる入声の圏の声点を取り上げたい。

「阿」は中古調類が平声のみであるが、呉語では例えば蘇州文読[au]白読[aʔ]とあるように、入声の読みも存在する(北京大学中国語文学系言語学教研室編2003)。この入声の読みは「阿大」「阿梅」など、人名の接頭辞として使われることが多く、『唐話纂要』に出現する「長女阿豊」も該当すると考えられる。加点者は白読の入声の読み(仮名音注＝ア)を採用しつつも、規範的な平声ではないため、破読に準じて圏の声点を付したと考えられる。

助辞としての「只」は中古調類が平声と上声のみであるが、江淮官話では例えば揚州文読[ʔɿ]白読[ʔsoʔ]とあるように、入声の読みも確認される(北京大学中国語文学系言語学教研室編2003)。「阿」の場合と同様、加点者は白読の入声の読み(仮名音注＝チツ)を採用しているものの、中古調類から逸脱したため、破読に準じて圏の声点を付したと考えられる。

3-2 第Ⅲ類

本稿では、第Ⅲ類に属する『東皐琴譜』の中で、書写時期が明確で、かつ加点例も比較的が多い文久二年写本(2-1-2節で触れた全文加点の「滄浪歌」と「漁樵問答」を除く)を対象に、声点の加点例を抽出した。本文末尾の〔附録B〕にこれを示す。また、〔附録B〕をさらに整理し、各中古調類の加点状況を統計すると、表3の通りである。表3における「他」は表1と同じである。

表3より、第Ⅲ類における加点は上声点と去声点の2種類に集中していることを改めて確認でき、その上声点と去声点は中古調類通りに加点されたと看取される。また、加点された中古上声字と中古去声字は、その声母音類に清・濁のいずれもあり、とくに偏っていることはない。多調字73例のうち、中古調類が上去のものが37例あり、半分を占めている。中古調類が平去のものに去声点が付された例も20例あり、上去に次いで多い。

表3 第Ⅲ類の加点

		文久二年写『東臯琴譜』					
		平	上	去	入	他	延
中古音類	平	2	4	4			10
	上		86	3		2	91
	去			116		1	117
	入				11		12
	他		26	39	3	5	73
	延	2	116	163	14	8	303

中古上声字に上声点、中古去声字に去声点といった対応関係自体は、3-1-1節で述べたように知識レベルで行われた可能性が高く、そこから現実の音調を読み取ることができない。しかし、第Ⅰ類と異なり、第Ⅲ類ではすべての字に声点を加点するわけではないため、加点という行為自体が有標的で、読み手への一種の注意喚起の機能を有すると考えられる。すなわち、第Ⅲ類の加点者には、声点で音調そのものを標記する意図がないものの、上声と去声のペアを明確に区別する需要が確実にあったと推測される。

心越系唐音を記す文献はもっぱら琴の譜本の類であり、その唐音の伝承と学習も音楽の文脈に置かれていると想定できるため、上述した中古上声と中古去声を区別する需要は音楽上の要請による可能性がある。しかし、『東臯琴譜』と題した文献の中には、唐音や声点が全くないものもあり⁸、中古調類の標示は必須ではないように思われる。また、仮に中古調類の判断が韻書の学習などを通して完全に知識レベルで行われたとすれば、平声・上声や平声・去声などではなく、わざわざ上声・去声に限定する必然性がないはずである。裏を返せば、加点者側には、上声か去声かの判断に困難をもたらす何かの事情があると考えられる。本稿では、やはりそれを原音音系の音声参照されたことに求めたい。

心越系唐音の原音音系について、有坂(1938)は東臯心越が杭州の出身であることに言及しているが、明確な判断はされていない。姜(2022)は音韻体系の特徴から杭州方言に共通語的要素が混入したものと判断している。同系統の唐音は、主に版本で伝わる訳官系のもものと異なり、2-1-3節で触れたように、版本への書入れや写本のもものが多く、仮名音注の訂正や複数の音形の併記がみられるため、果たしてすべて杭州方言であるかどうか、今後のさらなる研究に俟たざるをえないが、ひとまず江南地域で通用している呉語文読層か江淮官話洪巢片と想定して差し支えないであろう。そうなると、3-1-2節で掲げた表2に示した通り、原音音系には、現実の音声として、全濁上声字の去声化と上声・去声の近似が挙げられる。第Ⅲ類の加点者は、こうした現実の音声に触れ、上声と去声の区別が困難だと感じたために、声点によって上声と去声の調類を明確に標記したのであろう。

⁸ 例えば国文学研究資料館蔵杉浦正職校本(15-501-1~3)が挙げられる。

4 多調字の処理

4-1 破読の圈を使う場合

2-1節では、第I類と第IV類で、破読に圈の声点が付されると報告した。ここでいう「破読」は主として、(1)字体の仮借を識別して見た目通りには読まない場合と、(2)読みによって漢字の本義と転義を区別して本義でないように読む場合を指す(日本中国語学会編 2022)。(1)の例はそれほど多くなく、例えば『唐音学庸』「知者」(坤3ウ3)の「知」(中古平声)を、本字の「智」(中古去声)として読むため、去声の圈が加点されたことや、『游焉社常談』「你做甚」(上6ウ4)の「甚」(中古上去、寢沁韻)を、本字不明の「シヤア」(現代「啥」と表記、呉語において去声)と読むため、去声の圈が加点されたことなどが挙げられる。(2)は破読の中心となるが、そのうちの大部分は多調字で、調類の違いによって意味・用法が変わることとなる。本節では、この(2)の多調字に焦点をあてて考察する。

本稿では、第I類に関して、3-1節で扱った3種の文献を対象に、破読の圈が使われる多調字の加点例を抽出した。結果は本文末尾の〔附録C〕にまとめる。第IV類については、『慈悲水懺法』『忠義水滸伝解』『游焉社常談』の3つを対象に、破読の圈が使われる多調字の加点例を抽出した。『唐話纂要』初刊部にみられる圈の声点は、既に柯(2019)によって詳細に調べられたため、ここではその結果を整理して示した。結果は本文末尾の〔附録D〕にまとめる。

第IV類では加点がほとんど破読であるので、圈の声点は調類と意味の両方を標示する機能を有する。岡島冠山の『唐話纂要』初刊部もこの類型に属するが、同書の増補部から後の「官音」系資料にかけて、すなわち第I類では、字ごとに点の声点を加点するのが原則になったと考えられるが、それでもなお破読の圈を使用したのは、調類の標示よりも、むしろ意味への関心によるところが大きいであろう。もとより破読の加点は訓詁の知識を要する学問的な行為で、本義と転義を区別できたとしても現実の音声の習得に役に立つことはないと考えられる。『忠義水滸伝解』や『慈悲水懺法』、『唐音学庸』など、そもそも「読む」ための文献ならまだしも、『唐話使用』や『游焉社常談』のような会話教科書の性格を有するものにまで破読の圈が加点されたことは、近世における唐話の学習が、学問としての漢字知識の摂取と密接な関係にあることを示唆している。

4-1-1 共有された破読の認定

〔附録C〕〔附録D〕より、3つ以上の文献に出現する多調字と、それらに付された圈の声点を以下の表4に示す。なお、ここでは『唐話纂要』の初刊部と増補部を1つの文献にし、『唐話使用』と『唐音学庸』も同じ「岡島冠山官音」としてまとめる。

表4より、破読の対象となる多調字とそれに対する加点は、近世唐音の系統と原音音系の違いを越えて、各文献にある程度共通していると看取される。また、各文献に共通して破読の圈が多く去声に付されたのは、中国語の性質上、いわゆる「四声別義」の結果として、転義の多くが去声の読みとして現れ、近世唐音の加点者がそれを正確に認識したためだと考えられる。すなわち、近世唐音の加点者は、現実の中国語音声に接しているという共通点のほか、破読の認定も漢字知識として共有されていると推測される。

表4 3つ以上の文献に出現する多調字

出現回数	字	中古調類	破談の圏				
			『慈悲水懺法』	『唐話纂要』	岡島冠山官音	『忠義水滸伝解』	『遊焉社常談』
5	為	平去	[去]	[去]	[去]	[去]	[去]
	好	上去	[去]	[去]	[去]	[去]	[去]
	分	平去	[去]	[去]	[去]	[去]	[去]
	長	平上去	[上]	[上]	[上]	[上]	[上]
4	処	上去	[上]	[上]	[上]		[上]
	相	平去	[去]		[去]	[去]	[去]
3	那	平上去			[去]	[上][去]	[上][去]
	下	上去		[去]	[去]		[去]
	錯	去入		[去]	[去]		[去]
	悪	平去入		[平] [去]	[去]		[去]
	易	去入	[去]		[去][入]		[去]
	覚	去入		[去]		[去]	[去]
	難	平去	[去]	[去]	[去]		[去]
	遠	上去	[去]	[去]	[去]		[去]
	近	上去	[去]	[去]	[去]		[去]
	蔵	平去	[去]	[去]	[去]		[去]
	行宕	平去		[平]		[平]	[平] [去]
	上	上去		[上]	[上]		[上]
	更	平去	[平] [去]	[平]	[平]		[去]
	行梗	平去	[去]		[去]		[去]
	合	平去	[平]	[平]	[平]	[去]	[去]
中	平去		[去]	[去]		[去]	

4-1-2 調類と意味・用法との対応

2-1節で触れたように、近世唐音を記す文献はその多くが白話文であるため、漢字の意味・用法も多岐にわたる。白話文における多調字の処理は、訓詁に基づく本義と転義の認定のほかにも、より具体的な意味・用法をみる必要もあると考えられる。本稿では、加点了た多調字のうち、内容語とも機能語とも使われる「那」「下」「為」「教」「上」「令」を取り上げ、『慈悲水懺法』『唐音学庸』を除いた白話文資料4種にみられる調類と意味・用法との対応関係を整理し、さらに2-2節で取り上げた、当時の中国人の加点了が窺い知れる王驥徳『新校注古本西廂記』と比較した。表5にこれを示す。

「為」平声=動詞/去声=助辞, 「令」平声=助辞/去声=名詞・接頭辞といった対応関係は、近世唐音の加点了と中国人の加点了に共通しており、また『広韻』義注の記述にも符合している。それ以外の字においては両者が齟齬するとみられる。

「下」の場合、中国人の加点了では多調字としないが、近世唐音の加点了では、『忠義水滸伝解』を除き、上声=名詞・動詞/去声=動詞の構図がみられ、『広韻』義注に符合する形となる。「上」の場合、中国人の加点了では上声=動詞/去声=名詞・動詞のようにみえるが、上声の声点の一部の「唱」に限られ、特定の曲牌の要請による変読だと考えられるため、実質的には「下」と同様、多調字とされていない可能性が高い。一方、近世唐音の加点了では、『忠義水滸伝解』を除き、第I類で上声=名詞・動詞/去声=名詞、『遊焉社常談』で上声=動詞/去声=名詞・動詞の構図が看取され、いずれも動詞の用法を上声の声点に振り分ける点で『広韻』義注に符合している。

しかし、「下」「上」の補語の用法については、近世唐音で文献間に調類のゆれが確認される。もとより、補語の用法は概ね白話文にみられるもので、『広韻』義注との対応が不明瞭であり、韻書の記述から加点了すべき調類を導き出すことが困難だと考えられる。よって、補語の用法にみられる加点了のゆれは、

逆に、加点者が韻書の記述を参照して調類と意味・用法とを対応づけたことを示唆している。

「教」の場合、中国人の加点と近世唐音の加点は認定が異なっており、前者では平声＝動詞・助辞／去声＝名詞に振り分けているが、後者では平声＝助辞／去声＝動詞・名詞に振り分け、機能語的な用法と内容語的な用法との対立として捉えている。

「那」の場合、いずれも疑問（反語）と指示の用法を区別しているが、『忠義水滸伝解』『遊焉社常談』ではそれぞれ上声と去声に分け、中国人の加点と一致しているのに対し、『唐話使用』『説話』ではそれぞれ去声と上声に分け、反対になる。『唐話使用』の加点に果たして何が参照されたかは不明であるが、『広韻』では「那」去声に「語助」と記述されており、このような記述に引きずられ、疑問（反語）の用法を去声に認定した可能性がある。

総じてみれば、近世唐音では、多調字に対して特定の意味・用法を特定の調類と結びつけて識別する姿勢が確認されるが、韻書の記述を演繹的に適用する側面も窺える。

表5 「那」「下」「為」「教」「上」「令」の詳細

中古調類	『広韻』義注	『唐話纂要』 「和漢奇談」	『唐話使用』 「説話」	『忠義水滸伝解』	『遊焉社常談』	王驥徳 『新校注古本西廂記』
那	平	何也都也於也尽也				([平]通仮「挪」) 剛那一步遠
	上	俗言那事	(上)指示 再不可去走那条路	[上]疑問(反語) 在那里 (注釈＝ドコニアルノ)	[上]疑問(反語) 那里怕冷	[上]疑問(反語) 你那我心裏
	去	語助	[去]疑問(反語) 那能	[去]指示 那厮	[去]指示 那兩本 (注釈＝アノニサツ)	[去]指示 自那一夜聽琴之後
下	上	賤也去也後也底也降也	(上)名詞 清水寺坂下	(上)名詞/動詞/補語 足下/下天上帝/打下	×名詞/動詞/補語 時下, 下方 下馬, 下飯	×名詞/動詞/補語 放底下/下雨/垂下去 回廊下, 下方 下了一貼菜, 下酒
	去	行下	[去]補語 放心不下	[去]動詞/補語 下碁/滿面推下吹來	坐下, 担負不下	[去]動詞 下霜 瞧下去, 放心不下
為	平	作造為也	(平)動詞 伝為京中奇談	(平)動詞 転損為益	×動詞 為頭	×動詞 不知幾日起幾日為止 将我敵与賊漢為妻
	去	助也	[去]助辭 恐為他人先之	[去]助辭 青年高才為衆所推	[去]助辭 為余題一言	[去]助辭 為甚麼 我相思為他
教	平	効也	[平]使役の助辭 教市郎兵衛設酒相酌	[平]使役の助辭 教我可憐你	×名詞 教授(先生の意) ×使役の助辭「叫」	[平]動詞/使役の助辭 故教唆他言 教驚驚做妹妹拜哥哥
	去	教訓也又法也語也	(去)動詞/名詞 方望詳教 永靠其教訓	(去)動詞/名詞 不足教人 領先生恩教	叫再掘起來 (注釈＝教ト同音ニテ通スル)	×名詞 三教九流
上	上	登也升也	(上)名詞 [上]動詞 金牌上 上船	(上)名詞 [上]動詞 上等 上京	×名詞/動詞/補語 莎草地上, 走為上着 上山, 上馬	[上]動詞/補語 上了船/湧上心頭 明月纔上柳梢頭 ※一部「唱」の場合のみ
	去	君也猶天子也	(去)名詞 身上	(去)名詞/補語 身上/奉上	穿上, 趕不上	×名詞/動詞/補語 看我面上/上山/拜上 天上/上香/拽上書房門
令	平	使也	[平]使役の助辭 令我失礼於尊翁	[平]使役の助辭 令人得知		[平]使役の助辭 令他人耳聰
	去	善也命也律也法也		(去)接頭辭 令尊大人	×接頭辭 令尊	×名詞 聰咳嗽為令

※()=点の声点, []=破読の圈, ×=声点なし

4-2 多義でない場合

4-1節では、破読の圈を使った多調字の処理について、声点の加点和意味・用法との関連をみてきた。一方、多調字の中では、韻書の記述から意味・用法の区別を導き出せない一群も存在する（本稿では便宜上これを「多義でない」と呼ぶ）。例えば「怒」は上声と去声を有するが、『唐韻』ではいずれも「恚也」と注され、区別がつかない。「衆」は平声と去声を有するが、『唐韻』では去声にのみ「多也」と注され、平声には反切が付されただけで義注がない。本節では、近世唐音における多調字の処理の一端として、こうした多義でない字の加点を概観する。

そもそも第IV類と王驥德『新校注古本西廂記』では、必要がないためか、多義でない字には声点が施されていない。よって、本稿では第I類を対象に、多義でない舒声多調字の加点を調査し、現代方言調類の状況と対照した。表6にこれを示す。ここで舒声（平上去）に限定したのは、舒声と入声を跨ぐ場合、仮名音注の形から調類を判断して加点する可能性があるためである。また、ここでいう現代方言調類とは、方言調査のために編纂された中国社会科学院語言研究所編（1981）が示す調類のことを指し、同調査票の「説明」では、「方言中比較通行的音」のみを収録すると断っている。同様の判断は各地の字音を収録している北京大学中国語言文学系語言学教研室編（2003）にも確認できる。表6における各文献欄の「他」は、複数の声点が付された場合と、破読の圈が使われた場合を指す。多義でないにもかかわらず、「思」「先」など、破読の圈が加えられた字もあり、岡島冠山の唐話において意味・用法の違いがあったのかもしれない（[附録C]を参照）。

表6 第I類における多義でない字の加点

		『唐話纂要』「和漢奇談」					『唐話使用』「説話」					『唐音学庸』				
		平	上	去	他	延	平	上	去	他	延	平	上	去	他	延
中古調類	平去	13	—	1	4	18	14	—	5	3	22	10	—	4	4	18
	平上	2	2	—		4		2	—		2	1		—	1	2
	上去	—	11	6		17	—	13	5		18	—	10	4	2	16
	平上去		3			3		1			1			1		1
	延	15	16	7	4	42	14	16	10	3	43	11	10	9	7	37
漢字一覽	平去	如纒思鈔敲探潜沈看先 奔傍張忘望生輕衆					除如嘘纒題思嫫監兼任 看先貫院論償望興生輕轟衆					如思監沈任偏先貫振論 湯忘望凝興生衆訟				
	平上	粗披只叮					只仔					粗只				
	上去	左怒聚鑑濟禱走後厚后 右甚飲散宴算引					左怒聚通濟企弁掃走扣 後厚寿右染甚引仰					左惰怒聚媚掃後厚后寿 右散錢選引忿				
	平上去	頗但醒					但					頗				
現代方言調類																
		平	上	去	複数	延	平	上	去	複数	延	平	上	去	複数	延
中古調類	平去	11	—	4	3	18	12	—	4	6	22	6	—	6	6	18
	平上	3	1	—		4		2	—		2	1	1	—		2
	上去	—	10	5	2	17	—	10	7	1	18	—	9	5	2	16
	平上去	1	1	1		3			1		1	1				1
	延	15	12	10	5	42	12	12	12	7	43	8	10	11	8	37

表6より、多義でない字の声点は基本的に1つの調類しかなく、現代方言調類の分布とはそれほど変わらないと看取される。ただ、全濁上声と全濁去声の多調字に関しては、現代方言調類と第I類の加点で上声と認定された字が多いことに注意を要する。現代方言調類の認定は全濁上声が保たれている方言

の実態に基づいていると理解されるが、3-1節で述べたように、第Ⅰ類の原音音系は、全濁上声が維持されている可能性が低い。第Ⅰ類の加点は、ただ多義でない多調字の調類を決定するためだけで、原音音系以外の方言を参照するのもやや想定しにくい。すなわち、第Ⅰ類における上声の加点は、全濁上声の去声化の現実に対抗する形で作為的に行われた可能性がある。

いずれにせよ、多義でない多調字の調類を1つに定めるには、ランダムに決めるのでも、一律に特定の調類にするのでもないのであれば、何かしらの手がかりが必要なのはである。現代方言調類に近い分布をなしている点からみれば、中国語の音声に接することのできる加筆者の判断材料は、やはり現実の音声であろう。

5 おわりに

以上、近世唐音における声調の扱いをめぐって、(1)加筆の種類、(2)単調字の処理、(3)多調字の処理といった3つの角度から考察してきた。

黄檗系、心越系、訳官系はいずれも声点が施された文献を有し、そこにみられる声点の加筆は、被注漢字の量、声点の様式、加筆の方法によって4つの類型に分けることができる。岡島冠山が編纂に携わったものは概ね第Ⅰ類を形成しており、東阜心越が伝えた琴譜の類は大方第Ⅲ類をなしている。第Ⅱ類は破読を標記しないことで第Ⅰ類と異なり、すべての字に付点することで第Ⅲ類と異なるが、いずれも岡島冠山の唐話か東阜心越の琴と密接な関係にある。第Ⅳ類は破読を標記する点で第Ⅰ類に通じるところがあるが、破読にのみ加筆する点でほかの類から離れている。第Ⅳ類では訳官系の白話文のものが多く、黄檗系の文語文もみられる。上述の4つの類型のほか、当時の中国人の加筆が日本に流入したものと、遠山荷塘『諺解校注古本西廂記』が挙げられ、声調への関心は底本選びに影響を及ぼした可能性がある。

第Ⅰ類と第Ⅲ類を対象に、声点の加筆における単調字の処理をみると、基本的には中古調類通りに加筆されたことがわかるが、現実の音声を記録したものとは認められず、単に知識レベルで行われたものだと考えられる。しかし、そういった知識あるいは規範のもとで、第Ⅰ類では上声と去声を中心に中古調類に一致しない加筆が確認され、第Ⅲ類ではそもそも中古上声と中古去声のみ加筆したと確認される。これは、加筆者が調類の判断を助けるために原音音系を参照したこと起因すると推測される。原音音系では全濁上声が去声化しており、上声と去声の調値もかなり類似していると想定できる。第Ⅰ類では、参照された原音音系が混同を引き起こし、中古調類に一致しない加筆を生み出したと推測されるが、第Ⅲ類では、まさにそのような混同を避けるために中古上声と中古去声が正しく声点によって標記されたと推測される。

第Ⅰ類と第Ⅳ類を対象に、声点の加筆における多調字の処理をみると、調類によって意味・用法が変わるかどうかで、加筆の方針が異なると看取される。複数の意味・用法がある場合、加筆者は破読を認定して標記するとともに、特定の意味・用法を特定の調類と結びつけて識別すると考えられる。破読の認定は文献間に異なりがなく、漢字知識として複数の加筆者に共有されていると推測される。また、調類と意味・用法との結びつけは韻書の記述を演繹的に適用する側面も確認される。一方、韻書の記述から意味・用法の違いを全く導き出せない場合、加筆者は現実の音声を手がかりに加筆すべき調類を1つに定めると推測される。

巨視的にみれば、近世唐音における声調の扱いは、(a)中古調類の知識、(b)漢字の意味・用法の知識、

そして(c)原音音系の音声、この三者のいずれにも関わっているが、(c)よりも(a)(b)のほうが優先されているとみられる。すなわち、近世唐音における声調は、音写の性格を有する仮名音注と異なり、主として一種の漢字知識の表出だと言えよう。

また、本稿では、主に第Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ類を分析してきたが、第Ⅱ類についても第Ⅰ、Ⅲ類と対照しつつ精査する必要がある。第Ⅰ、Ⅳ類では、声点と仮名音注のほか、訓読のための返り点や合符、傍訓なども付されたことがあり、近世唐音における声点の加点と、近世漢文訓読との関連も考慮しなければならないであろう。これらは、声点加点文献のさらなる調査と加点例に対する個別的な考究も含めて、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 有坂秀世（1938）「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」『国語と国文学』15（10）、111-130.
- 石山裕慈（2011）『『本朝文粹』における漢語声調について』『訓点語と訓点資料』126、18-33.
- 王竣磊（2024）「訳官系唐音の重層性と原音音系」『訓点語と訓点資料』152、144-125.
- 柯愛霞（2019）『『唐話纂要』の音注に関する研究』文教大学言語文化研究科博士論文（未公開）
- 川島優子（2009）「江戸時代における白話小説の読まれ方—鹿児島大学付属図書館玉里文庫蔵「金瓶梅」を中心として—」『中国中世文学研究』56、59-79.
- 許宝華・湯珍珠編（1988）『上海市区方言志』上海教育出版社
- 姜复寧（2022）「東阜心越琴譜日漢対音的語音特点与音系性質」『励耘語言學刊』36、113-131.
- 古典研究会編（1977）『唐話辞書類集 別巻』汲古書院
- 呉波（2007）「江淮官話語音研究」復旦大学中国語言文学系博士論文（呉波2020に部分再録）
- 呉波（2020）『江淮官話音韻研究』商務印書館
- 佐々木勇（2009）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』汲古書院
- 中国社会科学院語言研究所編（1981）『方言調査字表（修訂本）』商務印書館
- 趙元任（1928）『現代吳語的研究』清華学校研究院（商務印書館2017再版）
- 日本中国語学会編（2022）『中国語学辞典』岩波書店
- 沼本克明（1973）「唐末上声全濁字の去声化を通じて見たる日本漢音の体系について」『国語と国文学』50（2）、48-67.
- 沼本克明（1976）「吳音の声調体系について」『国語学』107、1-15.
- 沼本克明（1992）「字音直読資料の長音表記の変遷—音節構造との関係—」『訓点語と訓点資料』88、105-114.
- 樊可人（2017）「遠山荷塘『諺解校注古本西廂記』の成立経緯について」『日本中国学会報』69、242-256.
- 北京大学中国語言文学系語言学教研室編（2003）『漢語方音字匯（第二版重排本）』語文出版社

【附記】

本稿は令和7年度東京大学国語研究室会（2025年7月19日、東京大学）における口頭発表をもとに加筆修正したものである。本稿はJSPS科学研究費25KJ0905、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2108の助成を受けたものである。

【附録A】第I類における中古調類に一致しない声点加例一覧

※各項目では、「被注漢字 | 中古調類 | (声点) 用例 1 例 / 所在位置」の形式で掲出する。

※各文献では、中国社会科学院語言研究所編 (1981) に従い、被注漢字の中古音類順で配列する。

※圏の声点は「[]」によって標記する。

■『唐話纂要』「和漢奇談」(1718)

- 01 阿 | 平 | [入] 長女阿豊 / 18 オ 3
- 02 鍋 | 平 | (去) 桶鍋碗碟 / 20 オ 1
- 03 厦 | 上 | (去) 厦南 / 20 ウ 6
- 04 且 | 上 | (去) 且曰 / 4 オ 2
- 05 爹 | 平 | (上) 爹娘 / 4 ウ 7
- 06 捨 | 上 | (平) 依依難捨 / 20 ウ 1
- 07 野 | 上 | (去) 北野辺 / 3 オ 1
- 08 歩 | 去 | (上) 脚步 / 3 ウ 2
- 09 都 | 平 | (去) 我都依從 / 8 ウ 2
- 10 預 | 去 | (上) 於俺何預 / 2 ウ 5
- 11 扶 | 平 | (上) 扶起 / 3 ウ 1
- 12 附 | 去 | (上) 附於香公身上 / 21 ウ 6
- 13 屢 | 去 | (上) 屢有是非 / 4 ウ 7
- 14 住 | 去 | (上) 遂來往焉 / 17 ウ 7
- 15 待 | 上 | (去) 待以長上之礼 / 18 ウ 4
- 16 改 | 上 | (去) 改面換骨 / 8 ウ 5
- 17 祭 | 去 | (上) 祭拜 / 3 オ 7
- 18 誓 | 去 | (上) 自誓 / 19 ウ 6
- 19 噬 | 去 | (上) 噬臍而退悔 / 7 オ 2
- 20 奚 | 平 | (上) 是奚難乎 / 17 オ 6
- 21 誨 | 去 | (上) 教誨 / 6 オ 2
- 22 最 | 去 | (上) 最有其驗 / 8 ウ 7
- 23 彼 | 上 | (去) 足下往彼 / 7 オ 3
- 24 弥 | 平 | (上) 弥增感激 / 4 オ 5
- 25 是 | 上 | (去) 必是 / 8 オ 2
- 26 似 | 上 | (去) 似掌上之珍 / 4 ウ 5
- 27 置 | 去 | (上) 置酒款待 / 4 ウ 1
- 28 始 | 上 | (去) 衆人始審 / 22 オ 5
- 29 紀 | 上 | (去) 年紀 / 4 ウ 7
- 30 記 | 去 | (上) 内記 / 20 ウ 2
- 31 保 | 上 | (去) 保祐 / 4 ウ 8
- 32 燒 | 平去 | (上) 燒百日二十壇紙錢 / 21 オ 8
- 33 料 | 平去 | (上) 豈料 / 3 オ 2

- 34 關 | 去 | (上) 困定相關 / 2 オ 7
- 35 幼 | 去 | (平) 欺負幼弱 / 2 オ 7
- 36 尷 | 平 | (上) 不尷不尬 / 4 ウ 7
- 37 審 | 上 | (去) 衆人始審 / 22 オ 5
- 38 辨 | 上 | (去) 難以辨 / 19 オ 8
- 39 善 | 上 | (平) 善人 / 21 ウ 6
- 40 搬 | 平 | (去) 移搬我家 / 6 オ 1
- 41 煩 | 平 | (去) 煩汝 / 1 ウ 4
- 42 尽 | 上 | (去) 定欲尽醉 / 1 オ 7
- 43 困 | 去 | (上) 父母之困 / 16 ウ 3
- 44 蕩 | 上 | (去) 神魂飄蕩 / 18 ウ 8
- 45 箱 | 平 | (上) 櫃箱 / 19 ウ 8
- 46 尚 | 平去 | (上) 尚謂 / 7 ウ 2
- 47 整 | 上 | (去) 衣冠整齊 / 1 ウ 3
- 48 酪 | 上 | (平) 酪酒 / 5 ウ 2
- 49 動 | 上 | [去] 動土 / 3 ウ 3
- 50 夢 | 平去 | (上) 忽夢一官人 / 1 ウ 2
- 51 供 | 平去 | (上) 供酒果 / 3 オ 7
- 52 共 | 平去 | (上) 共為優遊 / 1 ウ 1

■『唐話使用』「説話」(1725)

- 01 他 | 平 | (上) 竟被他騙 / 5 8 オ 4
- 02 可 | 上 | (平) 不可 / 5 13 ウ 1
- 03 禍 | 上 | (去) 天報之以禍 / 5 10 オ 3
- 04 借 | 去 | (上) 恩借十來金 / 4 20 ウ 6
- 05 這 | 去 | (上) 這五貫 / 5 6 ウ 4
- 06 部 | 上 | (去) 一部 / 4 24 オ 6
- 07 賭 | 上 | (平) 賭坊 / 5 6 ウ 3
- 08 嘗 | 平去 | (上) 過嘗 / 4 4 オ 4
- 09 屢 | 去 | (上) 屢蒙厚惠 / 4 13 ウ 3
- 10 注 | 去 | (上) 注定 / 4 19 ウ 6
- 11 待 | 上 | (去) 款待 / 4 3 ウ 2
- 12 怠 | 上 | (去) 怠慢 / 4 11 ウ 7
- 13 改 | 上 | (去) 悔心改過 / 5 6 オ 2

14 罷 | 上 | (去) 便罷了 / 四 19 才 2
 15 懈 | 去 | (上) 懈慢 / 五 26 ウ 7
 16 替 | 去 | (上) 你替我 / 四 15 才 5
 17 倍 | 上 | (去) 十倍 / 六 3 才 4
 18 罪 | 上 | (去) 有罪 / 四 11 ウ 3
 19 只 | 平上 | [入] 只是 / 四 8 ウ 7
 20 宜 | 平 | (去) 便宜 / 四 15 ウ 1
 21 眉 | 平 | (上) 燃眉 / 四 19 ウ 2
 22 厠 | 去 | (平) 東厠 / 六 5 才 2
 23 毀 | 上 | (去) 毀壞 / 四 24 才 3
 24 為 | 平去 | (上) 今日為始 / 五 7 才 6
 25 誹 | 平去 | (上) 誹謗 / 五 19 ウ 3
 26 熬 | 平 | (去) 難熬 / 四 9 才 3
 27 抄 | 平去 | (上) 抄這部書 / 五 22 才 4
 28 鈔 | 平去 | [上] 錢鈔 / 四 20 才 2
 29 梢 | 平 | (上) 下梢 / 五 6 ウ 2
 30 燒 | 平去 | (上) 燒香 / 六 1 ウ 3
 31 料 | 平去 | (上) 親自料理 / 四 14 ウ 4
 32 有 | 上 | (平) 未有 / 四 15 才 1
 33 暫 | 去 | (平) 暫且 / 四 18 才 1
 34 綻 | 去 | (上) 破綻 / 五 10 ウ 5
 35 善 | 上 | [去] 能文善詩 / 四 1 ウ 6
 36 件 | 上 | (去) 這件事 / 四 13 才 6
 37 搬 | 平 | (去) 搬人家是非 / 五 21 才 3
 38 漫 | 去 | (平) 撒漫 / 五 8 才 3
 39 尽 | 上 | (去) 感謝不尽 / 四 1 才 7
 40 陣 | 去 | (平) 敗陣 / 五 7 才 2
 41 遜 | 去 | (上) 遜讓 / 五 18 ウ 2
 42 幫 | 平 | (去) 那幫閑們 / 五 8 才 7
 43 旺 | 去 | (上) 興旺 / 六 3 才 4
 44 項 | 上 | [去] 等項職事 / 六 4 才 5
 45 症 | 平 | (去) 輕症 / 五 5 ウ 2
 46 領 | 上 | (去) 領先生清誨 / 五 20 才 7
 47 靜 | 上 | (去) 靜即無事 / 五 24 ウ 7
 48 醅 | 上 | (平) 醅酒 / 四 10 ウ 6
 49 穎 | 上 | (平) 穎悟非常 / 五 25 ウ 4
 50 共 | 平去 | (上) 衆皆所共欽仰 / 五 18 ウ 2

■ 『唐音学庸』 (1727)

01 譽 | 平去 | (上) 以永終譽 / 坤 22 才 6
 02 緒 | 上 | (去) 千載不伝之緒 / 坤序 4 ウ 5
 03 溥 | 上 | (去) 溥博淵泉 / 坤 23 才 5
 04 喻 | 去 | (上) 能喻諸人 / 乾 8 ウ 5
 05 待 | 上 | (去) 待其人而後行 / 坤 20 才 4
 06 誓 | 去 | (上) 秦誓曰 / 乾 11 才 3
 07 第 | 去 | (上) 次第節目 / 乾序 2 才 6
 08 倍 | 上 | (去) 其功倍於小学 / 乾序 3 ウ 6
 09 罪 | 上 | (去) 無所逃罪 / 乾序 5 才 3
 10 著 | 平 | (上) 見乎著龜 / 坤 17 ウ 6
 11 示 | 去 | (上) 示諸掌乎 / 坤 12 才 4
 12 之 | 平 | (去) 天下之大本 / 坤 2 才 5
 13 季 | 去 | (上) 王季 / 坤 10 ウ 1
 14 畏 | 去 | (上) 大畏民志 / 乾 4 ウ 5
 15 道 | 上 | [去] 道得衆則得国 / 乾 10 才 6
 16 盜 | 去 | (平) 盜臣 / 乾 12 ウ 4
 17 慥 | 去 | (上平) 胡不慥慥尔 / 坤 8 才 2
 18 佑 | 去 | (上) 保佑命之 / 坤 10 才 4
 19 審 | 上 | (去) 審問之 / 坤 15 ウ 6
 20 衽 | 去 | (上) 衽金革 / 坤 5 ウ 2
 21 僭 | 上 | (去) 瑟兮僭兮 / 乾 4 才 2
 22 辯 | 上 | (去) 論辯 / 坤序 5 ウ 5
 23 辨 | 上 | (去) 辨貴賤 / 坤 11 ウ 4
 24 善 | 上 | [去] 善誦者 / 坤 1 ウ 4
 25 憲 | 去 | (平) 憲章文武 / 坤 22 ウ 2
 26 顛 | 上 | (去) 莫顛乎微 / 坤 2 才 3
 27 喧 | 平 | (上) 赫兮喧兮 / 乾 4 才 2
 28 諠 | 平 | (上) 終不可諠兮 / 乾 4 才 3
 29 僅 | 去 | (上) 僅出於其門人 / 坤序 5 才 3
 30 尽 | 上 | (去) 不得尽其辭 / 乾 4 ウ 5
 31 遯 | 上去 | (平) 遯世 / 坤 6 才 3
 32 暢 | 去 | (上) 曲暢旁通 / 坤序 6 才 2
 33 讓 | 去 | (上) 一國興讓 / 乾 8 才 6
 34 恍 | 平 | (上) 恍然 / 坤序 5 ウ 2
 35 盲 | 平 | (去) 晦盲否塞 / 乾序 4 才 6
 36 領 | 上 | (去) 綱領 / 乾 13 才 4
 37 令 | 平去 | (上) 憲憲令德 / 坤 10 才 3

【附録B】第三類における声点加点点例一覧

※各項目では、「被注漢字 | 中古調類 | (声点) 用例 1 例 / 所在位置」の形式で掲出する。

※中国社会科学院語言研究所編 (1981) に従い、被注漢字の中古音類順で配列する。

■文久二年写『東皐琴譜』(1862)

※全文加点点の「滄浪歌」と「漁樵問答」を除く。

001 大 去 (去) 大小 / 24 ウ 2	033 戸 上 (上) 万戸 / 6 オ 2
002 個 去 (去) 真個好 / 24 ウ 12	034 惡 平去入 (去) 惡利口 / 4 オ 4
003 可 上 (上) 可相狎 / 9 オ 4	035 貯 上 (去) 広貯 / 22 ウ 10
004 我 上 (上) 為我吹 / 8 オ 6	036 楚 上去 (上) 重楚辞 / 11 オ 4
005 荷 平上 (上) 荷蕢 / 19 ウ 7	037 処 上去 (去) 危処 / 9 ウ 11
006 朶 上 (上) 幾朶梅花 / 12 オ 7	038 汝 上 (上) 勸汝 / 14 オ 13
007 坐 上去 (上) 坐列 / 11 ウ 7	039 去 上去 (去) 去年 / 7 ウ 11
008 過 平去 (去) 過山前 / 19 ウ 7	040 与 平上去 (上) 知与誰同 / 15 オ 6
009 菓 上 (上) 瓜菓 / 16 ウ 4	041 付 去 (去) 付之一笑 / 25 オ 8
010 臥 去 (去) 虎跳竜臥 / 13 ウ 9	042 賦 去 (去) 賦詩 / 33 オ 6
011 火 上 (上) 火伏 / 17 ウ 1	043 撫 上 (上) 撫孤松 / 30 ウ 12
012 貨 去 (去) 貨財 / 22 オ 12	044 無 平 (平) 無媒徑路 / 5 ウ 2
013 和 平去 (去) 声和流泉 / 19 ウ 11	045 武 上 (上) 武夷 / 14 オ 3
014 駕 去 (去) 復駕言 / 31 オ 6	046 趣 去 (去) 成趣 / 30 ウ 2
015 下 上去 (上) 為下不倍 / 16 オ 5	047 数 上去 (上) 数帰期 / 3 ウ 5
(去) 霜禽欲下 / 8 ウ 8	048 樹 上去 (去) 樹影 / 23 オ 5
016 且 上 (上) 且莫厭流霞 / 12 オ 3	049 寓 去 (去) 寓之酒 / 23 ウ 9
017 写 上 (上) 但写声 / 10 オ 6	050 雨 上去 (上) 宿雨 / 3 ウ 1
018 謝 去 (去) 開先謝早 / 24 ウ 6	051 宇 上 (上) 寓形宇内 / 32 ウ 2
019 者 上 (上) 鼓琴於門者 / 17 ウ 3	052 羽 上去 (上) 綴羽 / 10 オ 4
020 也 上 (上) 故知此也 / 18 オ 15	053 態 去 (去) 態歛翁 / 17 ウ 13
021 野 上 (上) 平野 / 23 ウ 11	054 待 上 (上) 待来 / 8 オ 8
022 夜 去 (去) 夜怨 / 19 ウ 13	055 乃 上 (上) 乃戢商綴羽 / 10 オ 4
023 化 去 (去) 乘化 / 33 オ 6	056 載 上去 (去) 万物載焉 / 22 オ 2
024 華 平去 (去) 華岳 / 21 ウ 17	057 在 上去 (上) 在人間 / 20 オ 5
025 土 上 (上) 一撮土 / 21 ウ 15	058 慨 去 (去) 慷慨 / 18 オ 13
026 路 去 (去) 無媒徑路 / 5 ウ 2	059 海 上 (上) 福海 / 12 オ 3
027 素 去 (去) 彈我素琴 / 9 ウ 1	060 太 去 (去) 太守 / 24 オ 4
028 古 上 (上) 古今 / 10 オ 10	061 泰 去 (去) 泰来否極 / 25 オ 4
029 故 去 (去) 懷故苑 / 14 オ 11	062 奈 去 (去) 奈老何 / 27 オ 5
030 五 上 (上) 玉窓五見 / 7 ウ 3	063 罷 上 (去) 罷遠征 / 6 オ 8
031 悟 去 (去) 悟已往之不諫 / 28 ウ 9	064 際 去 (去) 此際 / 17 オ 4
032 虎 上 (上) 虎跳竜臥 / 13 ウ 9	065 制 去 (去) 制五兵 / 17 ウ 15
	066 世 去 (去) 遊世 / 23 オ 9
	067 帝 去 (去) 帝郷 / 32 ウ 8

068 礼 | 上 | (上) 崇礼 / 16 才 3
 069 济 | 上去 | (去) 济汾河 / 26 ウ 10
 070 繫 | 去 | (去) 繫龜茲 / 11 才 6
 071 配 | 去 | (去) 配天 / 22 才 16
 072 倍 | 上 | (去) 為下不倍 / 16 才 7
 073 媒 | 平 | (平) 無媒徑路 / 5 ウ 2
 074 内 | 去 | (去) 寓形宇内 / 32 ウ 2
 075 鱸 | 去 | (去) 斫鱸 / 14 才 9
 076 外 | 去 | (去) 有形外 / 7 才 2
 077 会 | 去 | (去) 会雅 / 17 ウ 13
 078 話 | 去 | (去) 情話 / 31 才 8
 079 歳 | 去 | (去) 歳七月 / 17 ウ 1
 080 綴 | 去 | (去) 綴羽 / 10 才 4
 081 彼 | 上 | (上) 弘彼白石 / 9 ウ 1
 082 俾 | 上 | (上) 俾我雄子 / 18 才 5
 083 荔 | 去 | (去) 暢好荔枝 / 14 才 11
 084 紫 | 上 | (上) 紫陌 / 14 ウ 4
 085 積 | 去入 | (去) 広積 / 22 ウ 10
 086 此 | 上 | (平) 此曲 / 10 才 8
 | (上) 到此 / 7 才 6
 087 紙 | 上 | (上) 落紙争飛 / 13 ウ 9
 088 只 | 平上 | (上) 只丈夫 / 13 ウ 3
 089 是 | 上 | (上) 総是 / 6 才 6
 090 寄 | 去 | (去) 寄書 / 7 ウ 11
 091 義 | 去 | (去) 武義双輯 / 18 才 9
 092 易 | 去入 | (去) 易安 / 30 才 8
 093 比 | 平上去 | (去) 比意 / 18 才 3
 094 否 | 上 | (上) 泰来否極 / 25 才 6
 095 備 | 去 | (去) 備群娛 / 18 才 13
 096 美 | 上 | (上) 衆美 / 23 才 7
 097 地 | 去 | (去) 天地 / 6 ウ 8
 098 自 | 去 | (去) 自然 / 20 才 15
 099 四 | 去 | (去) 四時 / 6 ウ 6
 100 致 | 去 | (去) 致广大 / 15 ウ 15
 101 至 | 去 | (去) 至此 / 7 ウ 7
 102 視 | 上去 | (去) 視胡若芥 / 18 才 9
 103 二 | 去 | (去) 不二 / 21 ウ 3
 104 里 | 上 | (上) 花叢里 / 11 ウ 9

105 理 | 上 | (上) 此理 / 24 ウ 8
 106 子 | 上 | (上) 君子 / 15 ウ 13
 107 字 | 去 | (去) 錦字書 / 7 ウ 5
 108 思 | 平去 | (去) 思入 / 7 才 2
 109 辞 | 平 | (去) 休辞醉 / 12 才 9
 110 似 | 上 | (上) 似千古 / 9 ウ 7
 111 植 | 去 | (去) 植杖 / 33 才 2
 112 士 | 上 | (上) 秋士休悲 / 14 才 3
 113 事 | 去 | (去) 無事 / 6 ウ 2
 114 使 | 上去 | (上) 使人嗟 / 7 ウ 5
 | (去) 使西来 / 8 才 6
 115 始 | 上 | (上) 始憂羽 / 17 ウ 5
 116 試 | 去 | (去) 試聽 / 20 才 5
 117 市 | 上 | (上) 遠市朝 / 5 ウ 4
 118 記 | 去 | (去) 記得当初 / 27 ウ 6
 119 擬 | 上 | (上) 擬今宵 / 17 才 2
 120 喜 | 上 | (上) 荣休喜 / 24 ウ 6
 121 意 | 去 | (去) 深意 / 12 才 1
 122 矣 | 上 | (上) 鳳凰鳴矣 / 13 才 2
 123 已 | 上去 | (上) 而已 / 18 才 5
 124 以 | 上 | (上) 以霑襟 / 10 才 2
 125 幾 | 平上去 | (上) 別来幾春 / 7 ウ 1
 126 既 | 去 | (去) 既明且哲 / 16 才 13
 127 氣 | 去 | (去) 血氣 / 22 才 14
 128 毅 | 去 | (去) 毅夫 / 18 才 7
 129 睡 | 去 | (去) 睡覺 / 6 ウ 2
 130 委 | 平上 | (上) 委青苔 / 8 才 10
 131 為 | 平去 | (去) 為我吹 / 8 才 6
 132 淚 | 去 | (去) 淚淋漓 / 10 才 2
 133 醉 | 去 | (去) 休辞醉 / 12 才 9
 134 萃 | 去 | (去) 萃秀 / 23 才 3
 135 水 | 上 | (上) 水清淺 / 8 ウ 6
 136 未 | 去 | (去) 未遠 / 29 才 4
 137 貴 | 去 | (去) 貴人頭上 / 5 ウ 6
 138 蔚 | 去 | (去) 蔚然 / 23 ウ 1
 139 謂 | 去 | (去) 敢謂 / 10 ウ 4
 140 保 | 上 | (上) 以保其身 / 16 才 13
 141 宝 | 上 | (上) 宝蔵 / 22 才 8

142 擣 | 上 | (上) 擣衣声 / 6 才 2
 143 到 | 去 | (去) 到処 / 14 才 7
 144 道 | 上 | (上) 得道仙翁 / 2 ウ 2
 145 惱 | 上 | (上) 辱休惱 / 24 ウ 6
 146 老 | 上 | (上) 扶老 / 30 ウ 2
 147 早 | 上 | (上) 早尽 / 16 ウ 4
 148 操 | 平去 | (去) 流水操 / 10 ウ 6
 149 草 | 上 | (上) 百草 / 12 才 11
 150 告 | 去入 | (去) 農人告予 / 31 ウ 2
 151 傲 | 去 | (去) 寄傲 / 30 才 6
 152 好 | 上去 | (上) 暢好荔枝 / 14 才 11
 153 棹 | 去 | (去) 棹孤舟 / 31 ウ 6
 154 巧 | 上去 | (上) 機巧 / 24 ウ 4
 155 妙 | 去 | (去) 妙指 / 10 才 8
 156 小 | 上 | (上) 嫌小人 / 4 才 2
 157 笑 | 去 | (去) 付之一笑 / 25 才 8
 158 照 | 去 | (去) 永照扶桑 / 22 ウ 2
 159 少 | 上去 | (上) 人知少 / 24 ウ 8
 | (去) 年少 / 11 才 4
 160 鳥 | 上 | (上) 此鳥 / 12 ウ 6
 161 釣 | 去 | (去) 重上釣魚磯 / 13 ウ 13
 162 吊 | 去 | (去) 吊影 / 9 ウ 9
 163 窈 | 上 | (上) 窈窕 / 12 ウ 8
 164 了 | 上 | (上) 鵲橋成了 / 16 ウ 2
 165 嘯 | 去 | (去) 舒嘯 / 33 才 4
 166 叫 | 去 | (去) 叫秋木 / 9 ウ 11
 167 窈 | 上 | (上) 窈窕 / 12 ウ 8
 168 奏 | 去 | (去) 奏霹靂之商声 / 17 ウ 3
 169 口 | 上 | (上) 惡利口 / 4 才 4
 170 叩 | 上 | (上) 叩宮 / 17 ウ 7
 171 後 | 上去 | (上) 後行 / 15 ウ 9
 172 厚 | 上去 | (上) 敦厚 / 16 才 3
 173 候 | 去 | (去) 候門 / 29 ウ 8
 174 富 | 去 | (去) 富貴不淫 / 7 才 4
 175 負 | 上 | (上) 負心 / 27 ウ 2
 176 阜 | 上 | (上) 阜吾民之財 / 4 ウ 5
 177 復 | 去入 | (去) 復幾時 / 32 ウ 2
 178 覆 | 去入 | (去) 万物覆焉 / 21 ウ 13

179 酒 | 上 | (上) 寿酒 / 12 才 7
 180 就 | 去 | (去) 三径就荒 / 29 ウ 8
 181 秀 | 去 | (去) 萃秀 / 23 才 3
 182 岫 | 去 | (去) 出岫 / 30 ウ 8
 183 手 | 上 | (上) 携手処 / 14 ウ 6
 184 首 | 上去 | (上) 矯首 / 30 ウ 6
 185 守 | 上去 | (去) 太守 / 24 才 4
 186 獸 | 去 | (去) 禽獸 / 22 才 6
 187 寿 | 上去 | (上) 寿酒 / 12 才 7
 188 久 | 上 | (上) 久矣 / 13 ウ 1
 189 旧 | 去 | (去) 富春旧跡 / 13 ウ 13
 190 有 | 上 | (上) 鶴有乘軒 / 4 才 4
 191 感 | 上 | (上) 感吾生之行休 / 32 才 5
 192 哈 | 平去 | (去) 氣鳴哈 / 17 ウ 11
 193 暗 | 去 | (去) 暗里 / 17 才 4
 194 涉 | 入 | (入) 日涉 / 30 ウ 2
 195 厭 | 上去入 | (去) 且莫厭流霞 / 12 才 5
 196 俺 | 去 | (去) 辜負俺 / 27 ウ 4
 197 泛 | 去 | (去) 玉觥滿泛 / 12 才 3
 198 怎 | 上 | (上) 教人怎禁 / 28 才 7
 199 輯 | 入 | (入) 武義双輯 / 18 才 9
 200 戢 | 入 | (入) 戢商 / 10 才 4
 201 斟 | 平 | (去) 淺淺斟 / 27 ウ 8
 202 審 | 上 | (上) 審容膝之易安 / 30 才 6
 203 拾 | 入 | (入) 剪羯如拾 / 18 才 11
 204 任 | 平去 | (去) 任去留 / 32 ウ 4
 205 灘 | 平 | (去) 過巖灘 / 13 ウ 11
 206 但 | 平上去 | (上) 但写声 / 10 才 6
 207 散 | 上去 | (上) 聚散 / 14 ウ 8
 208 眼 | 上 | (上) 先偷眼 / 9 才 2
 209 板 | 上 | (上) 不須檀板 / 9 才 6
 210 慢 | 去 | (去) 慢亭 / 14 才 3
 211 諫 | 去 | (去) 悟已往之不諫 / 28 ウ 9
 212 澗 | 去 | (去) 幽澗 / 9 ウ 3
 213 變 | 去 | (去) 變態 / 7 才 2
 214 剪 | 上 | (上) 剪羯如拾 / 18 才 11
 215 淺 | 平上 | (上) 淺淺斟 / 27 ウ 8
 216 賤 | 去 | (去) 貧賤樂 / 7 才 4

217 洩 | 去入 | (入) 不洩 / 22 才 2
 218 善 | 上 | (上) 善手明徹 / 9 ウ 3
 219 羯 | 入 | (入) 剪羯如拾 / 18 才 11
 220 遍 | 去 | (去) 遊遍芳叢 / 14 ウ 8
 221 片 | 去 | (去) 一片月 / 6 才 2
 222 撇 | 入 | (去) 撇我 / 27 ウ 10
 223 電 | 去 | (去) 電耀々兮 / 17 ウ 9
 224 見 | 去 | (去) 中見愁猿 / 9 ウ 9
 225 宴 | 上去 | (去) 佳宴 / 11 ウ 7
 226 滿 | 上 | (上) 金炉滿燕 / 11 ウ 9
 227 断 | 上去 | (去) 占断風情 / 8 ウ 4
 228 乱 | 去 | (去) 乱白雪 / 7 ウ 11
 229 算 | 上去 | (去) 算来由命 / 24 ウ 10
 230 転 | 上去 | (上) 初転 / 11 ウ 1
 231 倦 | 去 | (去) 鳥倦飛 / 30 ウ 8
 232 万 | 去 | (去) 万物 / 6 ウ 4
 233 勸 | 去 | (去) 勸汝 / 14 才 13
 234 願 | 去 | (去) 非吾願 / 32 ウ 8
 235 怨 | 平去 | (去) 夜怨 / 19 ウ 15
 236 遠 | 上去 | (上) 罷遠征 / 6 才 8
 | (去) 遠市朝 / 5 ウ 4
 237 恨 | 去 | (去) 此恨無窮 / 15 才 2
 238 鬢 | 去 | (去) 緑鬢 / 7 ウ 9
 239 尽 | 上 | (上) 可一言而尽 / 21 ウ 1
 | (去) 吹不尽 / 6 才 4
 240 振 | 平去 | (去) 振河海 / 21 ウ 17
 241 人 | 平 | (上) 教人怎禁 / 28 才 7
 242 引 | 上去 | (上) 引壺觴 / 30 才 2
 243 存 | 平 | (去) 松菊猶存 / 29 ウ 10
 244 峻 | 去 | (去) 峻極千天 / 15 ウ 3
 245 粉 | 上 | (上) 粉蝶 / 9 才 2
 246 問 | 去 | (去) 問学 / 15 ウ 13
 247 歎 | 入 | (入) 態歎翁 / 17 ウ 13
 248 莫 | 入 | (入) 且莫厭流霞 / 12 才 5
 249 浪 | 平去 | (去) 淚林浪 / 10 才 2
 250 樂 | 去入 | (入) 樂其樂也 / 24 才 8
 251 蔵 | 平去 | (去) 宝蔵 / 22 才 8
 252 慷 | 上 | (上) 慷慨 / 18 才 11

253 兩 | 上去 | (上) 三兩弦 / 20 才 7
 254 丈 | 上 | (上) 只丈夫 / 13 ウ 3
 255 暢 | 去 | (去) 暢好荔枝 / 14 才 11
 256 悵 | 去 | (去) 惆悵 / 28 ウ 7
 257 壯 | 去 | (去) 少壯 / 27 才 5
 258 斫 | 入 | (入) 斫鱸 / 14 才 9
 259 唱 | 去 | (去) 低低唱 / 27 ウ 8
 260 上 | 上去 | (上) 重上釣魚磯 / 13 ウ 13
 | (去) 貴人頭上 / 5 ウ 8
 261 勺 | 入 | (入) 一勺 / 22 才 8
 262 讓 | 去 | (去) 莫讓 / 11 才 6
 263 響 | 上 | (上) 彈響 / 19 ウ 1
 264 向 | 去 | (去) 向小園 / 8 ウ 4
 265 広 | 上 | (上) 致広大 / 15 ウ 15
 266 恍 | 平 | (上) 恍疑 / 23 才 7
 267 望 | 平去 | (去) 望蔚然深秀 / 23 ウ 1
 268 況 | 去 | (去) 何況 / 14 才 7
 269 往 | 上 | (上) 孤往 / 33 才 2
 270 覺 | 去入 | (入) 覺今是而昨非 / 29 才 4
 271 贈 | 去 | (去) 贈將離 / 13 ウ 5
 272 勝 | 平去 | (上) 今年花勝去年 / 15 才 4
 273 興 | 平去 | (去) 住興 / 6 ウ 8
 274 憶 | 入 | (入) 憶臨期 / 14 才 1
 275 冷 | 上 | (上) 冷々清々 / 28 才 7
 276 更 | 平去 | (去) 明年花更好 / 15 才 6
 277 衡 | 平 | (上) 乃瞻衡宇 / 29 ウ 4
 278 幸 | 上 | (上) 幸有 / 9 才 4
 279 命 | 去 | (去) 天命 / 33 才 8
 280 景 | 上 | (上) 此景 / 11 ウ 11
 281 竟 | 去 | (去) 竟不來 / 8 才 8
 282 影 | 上 | (上) 花影 / 3 ウ 5
 283 請 | 平上去 | (上) 請息交 / 31 才 2
 284 静 | 上 | (上) 静観 / 6 ウ 6
 285 性 | 去 | (去) 徳性 / 15 ウ 13
 286 聖 | 去 | (去) 聖人 / 15 ウ 1
 287 盛 | 平去 | (去) 盛徳 / 12 ウ 4
 288 益 | 入 | (入) 何益 / 25 才 6
 289 鼎 | 上 | (上) 鼎沸 / 11 ウ 7

290 聽 | 平去 | (去) 矢志而聽 / 10 才 2
291 定 | 去 | (去) 浮槎定 / 17 才 2
292 徑 | 去 | (上) 無媒徑路 / 5 ウ 2
| (去) 三徑就荒 / 29 ウ 8
293 舩 | 平 | (上) 玉舩滿泛 / 12 才 3
294 永 | 上 | (上) 永照扶桑 / 22 ウ 2
295 詠 | 去 | (去) 嘯詠 / 19 ウ 11
296 動 | 上 | (上) 浮動 / 8 ウ 8

297 総 | 上 | (上) 総是 / 14 ウ 6
298 鳳 | 去 | (去) 丹鳳 / 12 ウ 2
299 夢 | 平去 | (去) 夢見雖多 / 3 ウ 7
300 衆 | 平去 | (去) 衆芳搖落 / 8 ウ 2
301 重 | 平上去 | (去) 重楚辭 / 11 才 2
302 共 | 平去 | (去) 共金樽 / 9 才 6
303 用 | 去 | (去) 何用 / 25 才 2

【附録C】第I類における破読の圈を用いた多調字声点加例一覧

※各項目では、「被注漢字 | 中古調類 | (声点) 用例 1 例 / 所在位置」の形式で掲出する。

※各文献では、中国社会科学院語言研究所編 (1981) に従い、被注漢字の中古音類順で配列する。

※圈の声点は「[]」によって標記する。

■『唐話纂要』『和漢奇談』(1718)

- 01 下 | 上去 | (上) 天下 / 1 ウ 2
| [去] 放心不下 / 4 ウ 8
- 02 錯 | 去入 | [去] 多蒙錯愛 / 5 ウ 8
- 03 悪 | 平去入 | [平] 悪乎 / 18 オ 7
- 04 処 | 上去 | [上] 納之而与処 / 16 ウ 4
| (去) 処処作戯 / 1 オ 8
- 05 去 | 上去 | [上] 去其大半 / 17 ウ 8
| (去) 去酒樓 / 3 オ 2
- 06 語 | 上去 | (上) 語言不俗 / 17 ウ 4
| [去] 因語翁曰 / 19 オ 6
- 07 差 | 平去 | [去] 天神差恩人来救我
| / 3 オ 7
- 08 思 | 平去 | (平) 思一遊 / 16 オ 3
| [去] 自思難以脱命 / 21 ウ 3
- 09 為 | 平去 | (平) 売煙為生 / 1 オ 6
| [去] 為衆所敬 / 16 オ 2
- 10 造 | 上去 | [去] 同造其家 / 17 オ 8
- 11 好 | 上去 | (上) 好言安慰 / 3 ウ 1
| [去] 好事先生 / 5 ウ 3
- 12 鈔 | 平去 | [去] 少許錢鈔 / 1 オ 6
- 13 教 | 平去 | [平] 教爹娘竟放心不下
| / 4 ウ 7
| (去) 教訓 / 5 オ 7
- 14 少 | 上去 | (上) 而独少美人 / 16 オ 8
| [去] 或老或少 / 1 ウ 1
- 15 探 | 平去 | [去] 探聽 / 6 ウ 5
- 16 難 | 平去 | (平) 駟馬難追 / 5 オ 5
| [去] 得脱大難 / 22 オ 5
- 17 断 | 上去 | [上] 断然不従 / 3 オ 3
- 18 近 | 上去 | (上) 遠近美談 / 22 オ 7
| [去] 握近其前 / 18 ウ 8
- 19 分 | 平去 | (平) 分撥 / 4 オ 3
| [去] 福分 / 2 ウ 5

- 20 当 | 平去 | (平) 必当有始有終 / 4 オ 6
| [去] 不当其鋒 / 2 ウ 1
- 21 蔵 | 平去 | [去] 蔵此鎧甲鎗弓 / 18 オ 7
- 22 長 | 平上去 | (平) 長崎 / 16 オ 3
| [上] 兄長 / 8 オ 8
- 23 上 | 上去 | (上) 市上 / 16 ウ 6
| [上] 上馬 / 18 オ 8
| (去) 頭上 / 3 ウ 3
- 24 降 | 平去 | [平] 降其妖 / 7 ウ 6
- 25 勝 | 平去 | (平) 不勝感佩 / 5 ウ 8
| [去] 山水之勝 / 16 オ 3
- 26 更 | 平去 | (平) 更換新服 / 21 ウ 4
| [平] 約時二更 / 1 ウ 8
| (去) 更掙二三万金子 / 8 ウ 6
- 27 令 | 平去 | [平] 令人欽羨不已 / 5 ウ 3
- 28 中 | 平去 | (平) 在人叢中 / 2 オ 4
| [去] 不中其意 / 19 オ 4
- 29 縦 | 平去 | [平] 皆得縦觀 / 1 ウ 1
| (去) 縦然 / 6 ウ 7
- 30 従 | 平去 | (平) 断然不従 / 3 オ 3
| [去] 従僕 / 2 オ 3

■『唐話便用』『説話』(1725)

- 01 那 | 平上去 | (上) 那日感蒙枉駕
| / 四 11 ウ 5
| [去] 那知果有貴恙 / 四 5 オ 6
- 02 荷 | 平上 | [上] 弥荷厚德 / 四 12 オ 1
- 03 下 | 上去 | (上) 打下 / 五 6 ウ 6
| [去] 下碁 / 四 9 オ 7
- 04 作 | 去入 | [去] 作主 / 四 18 オ 6
- 05 錯 | 去入 | [去] 錯愛 / 四 1 オ 7
- 06 処 | 上去 | [上] 処置 / 六 5 オ 6
| (去) 此処 / 五 4 オ 6
- 07 差 | 平去 | [平] 差僧問候 / 六 1 ウ 6

08 切 | 去入 | [去] 一切/五16ウ4
 | (入) 切磋/四3オ5

09 比 | 平上去 | (上) 比別人不同/六3ウ4
 | [去] 比及到二更/五6ウ4

10 使 | 上去 | (上) 行或使之/五16ウ3
 | [去] 馳使問安/四8ウ2

11 為 | 平去 | (平) 多謝仁兄為賀/五3ウ5
 | [去] 為衆所信/四12オ4

12 教 | 平去 | [平] 教同僚代你/四9ウ3
 | (去) 越發請教/五4オ4

13 圈 | 平上去 | [上] 圈套/五8オ1

14 遠 | 上去 | (上) 不遠千里/五26ウ6
 | [去] 遠辱/五10ウ6

15 分 | 平去 | (平) 分付/四2ウ3
 | [去] 過分/五4オ3

16 当 | 平去 | (平) 本当即來/五2オ4
 | [去] 纔贖纔當/五6オ1

17 藏 | 平去 | (平) 小弟家所藏/四24オ5
 | [去] 管藏的/六4ウ5

18 喪 | 平去 | [去] 喪家敗身/五6オ3

19 長 | 平上去 | [上] 兄長/五15ウ4

20 上 | 上去 | (上) 上等/六4ウ5
 | [上] 上門/五13ウ6
 | (去) 拜上/四8オ6

21 更 | 平去 | [平] 比及到二更/五6ウ4
 | (去) 公務更多/五2オ5

22 令 | 平去 | [平] 令人欽羨/五1ウ6
 | (去) 尊降令節/五1オ5

23 聽 | 平去 | [平] 聽天聞道/五15ウ6
 | (去) 聽道足下新娶夫人
 /五1ウ5

■『唐音學庸』(1727)

01 假 | 上去 | [去] 奏假無言/坤24ウ6

02 舍 | 上去 | [上] 取舍/坤序5ウ6

03 度 | 去入 | (去) 不制度/坤21オ2
 | [入] 不可度思/坤9ウ2

04 惡 | 平去入 | [去] 如惡惡臭/乾6オ2

| (入) 如惡惡臭/乾6オ2

05 去 | 上去 | [上] 去讒遠色/坤14ウ1
 | (去) 去聖遠/坤序3ウ1

06 与 | 平上去 | [平] 其大知也与/坤4オ4
 | (上) 与天地參/坤17オ5
 | [去] 可以与知焉/坤6オ6

07 殺 | 去入 | [去] 親親之殺/坤12ウ4

08 弟 | 上去 | (上) 宜兄宜弟/乾9オ2
 | (去) 所求乎弟/坤7ウ5
 | [去] 民興弟/乾9ウ2

09 切 | 去入 | [去] 一切/坤序4オ2
 | (入) 如切如磋/乾4オ2

10 齊 | 平去 | (平) 齊其家/乾2オ1
 | [平] 齊明盛服/坤9ウ1

11 悖 | 去入 | [去] 言悖而出/乾10ウ4

12 只 | 平上 | [上] 樂只君子/乾10オ1

13 施 | 平去 | (去) 勿施於人/坤7ウ3
 | [去] 爭民施奪/乾10ウ3

14 猗 | 平上 | [上] 蓂竹猗猗/乾4オ1

15 易 | 去入 | (去) 居易以俟命/坤8ウ3
 | [去] 峻命不易/乾10オ6
 | [入] 不易之謂庸/坤1オ4

16 使 | 上去 | (上) 使為國家/乾12ウ6
 | [去] 所以使衆也/乾8オ3

17 幾 | 平上去 | [平] 庶幾/坤22オ5

18 衣 | 平去 | (平) 戎衣/坤10ウ3
 | [去] 衣錦尚絅/坤24オ5

19 為 | 平去 | (平) 為學次第者/乾1オ6
 | [去] 旅翻下為上/坤11ウ5

20 掃 | 上去 | [去] 洒掃/乾序1ウ6

21 好 | 上去 | (上) 如好好色/乾6オ3
 | [去] 如好好色/乾6オ2

22 樂 | 去入 | [去] 有所好樂/乾6ウ6
 | (入) 奏其樂/坤11ウ6
 | [入] 和樂/坤9オ2

23 夭 | 平上 | [平] 桃之夭夭/乾8ウ6

24 復 | 去入 | [去] 末復合為一理/坤1ウ2
 | (入) 復丁寧示人/坤25ウ6

19 上 | 上去 | [上] 請上後樓乘涼／三8ウ2
 20 降 | 平去 | [平] 不肯降／一21ウ3
 21 更 | 平去 | [平] 衣服破時更得新
 ／三21ウ5
 22 中 | 平去 | [去] 不中意／一17オ3
 23 從 | 平去 | [平] 從新寫／一17ウ5
 24 重 | 平上去 | [平] 重新做／一17ウ5
 25 種 | 上去 | [去] 專要種善根／三7オ3

■『忠義水滸伝解』(1757)

01 那 | 平上去 | [上] 在那里／6オ1
 ドゾト云フナリ
 | [去] 氣毬那字／16ウ2
 02 為 | 平去 | [去] 為余題一言／序1ウ6
 03 好 | 上去 | [去] 同好之人／序1ウ6
 04 覺 | 去入 | [去] 一覺／33ウ5
 05 分 | 平去 | [去] 好情分／35ウ6
 06 行_若 | 平去 | [平] 排行／16オ4
 07 相 | 平去 | [去] 君子相／83オ5
 08 長 | 平上去 | [上] 從長商議／76オ6
 09 從 | 平去 | [去] 一行部從／3オ3

■『遊焉社常談』(1770)

01 那 | 平上去 | [上] 貴州是那里／下1オ3

| [去] 那時節纔做大先生得過
 ／下4オ1
 02 磨 | 平去 | [去] 磨一磨／上10ウ5
 03 下 | 上去 | [去] 下霜／下4オ6
 04 錯 | 去入 | [去] 錯過／下8オ7
 05 惡 | 平去入 | [去] 可惡老鼠／下3オ1
 06 処 | 上去 | [上] 日寢处于老先生恩私中
 ／下9ウ6
 07 数 | 上去 | [上] 数起来／下13オ3
 08 易 | 去入 | [去] 先難後易／下3ウ3
 09 為 | 平去 | [去] 為甚麼／上6ウ1
 10 好 | 上去 | [去] 好吃茶／上7ウ6
 11 覺 | 去入 | [去] 要睡覺／上11オ8
 12 扇 | 平去 | [平] 扇一扇／上10オ4
 13 伝 | 平去 | [去] 左氏伝／下16ウ2
 14 分 | 平去 | [去] 情分／下13ウ4
 15 行_若 | 平去 | [平] 不在行／上6ウ7
 | [去] 不在行／下2オ7
 16 相 | 平去 | [去] 卿相之卿／下11オ4
 17 長 | 平上去 | [上] 兄長／下3ウ8
 18 上 | 上去 | [上] 上了船／上10ウ8
 19 行_梗 | 平去 | [去] 前言往行／下16オ9
 20 中 | 平去 | [去] 不中用／下4ウ1